

芦屋室内合奏団
第 45 回定期演奏会

The 45th Regular Concert, Ashiya Chamber Orchestra



うはら ホール

Uhara Hall

平成 23 年 11 月 3 日 (木)

Thursday, 3 November, 2011

開場午後 1 時 30 分 開演午後 2 時

Opening at 1:30 p.m. Beginning at 2 p.m.

ごあいさつ

1965年芦屋市浜町の橋本邸で発足した当団も、本日第45回目の定期演奏会を迎えました。今回は、現在わが国のチェロ奏者の中でも第一線で活躍されている、林 裕氏 をソリストにお迎えし、有名なハイドンの協奏曲と共に滅多に聴くことのできないセルヴェの曲を取り上げました。又メイン曲としては、前々回のシューベルト「死と乙女」、前回のドヴォルザーク「アメリカ」に続いて、弦楽四重奏曲の弦楽合奏版として、今回はベートーヴェン後期の四重奏曲第15番を取り上げます。

永年に亘り、変わらず当団を暖かく見守っていただいていますご来場の皆様方に、厚くお礼申し上げます。

2011年 11月 芦屋室内合奏団 団長 青柳 良
団員 一同

プログラム

G. F. ヘンデル 合奏協奏曲 口短調 作品6の12

I Largo II Allegro III Aria Larghetto e piano IV Largo V Allegro

1st Violin Solo	鳥丸 安雄
2nd Violin Solo	三村 誠子
Violoncello Solo	鳥丸 直子

F. J. ハイドン チェロ協奏曲 第1番 ハ長調 Hob. VIIb:1

I Moderato II Adagio III Finale. Allegro molto

チェロ独奏 林 裕

♪ 休 憩 ♪

A. F. セルヴェ 「サンクトペテルブルクの思い出」 作品15

チェロ独奏 林 裕

L. V. ベートーヴェン 弦楽四重奏曲 第15番 イ短調 作品132 <弦楽合奏版>

I Assai sostenuto-Allegro II Allegro ma non tanto III Molto adagio-
Andante IV Alla marcia, assai vivace V Allegro appassionato

指揮 酒井 睦雄

演奏 芦屋室内合奏団

■ G. F. ヘンデル 合奏協奏曲 口短調 作品 6 の 12

ジョージ・フレデリック・ヘンデル (1685-1759) は作品 3 と作品 6 と二つの合奏協奏曲集を残しているが、作品 6 の合奏協奏曲集は、1739 年の 9 月 29 日から 10 月 30 日までの僅か 1 ヶ月間に連続して作曲され、「12 のグランド・コンチェルト」のタイトルで翌年 4 月にロンドンで出版された。

本日演奏するのは、その最終曲にあたり、コンチェルティーノと呼ばれる独奏楽器群とリピーエーノと呼ばれる合奏からなり、様式的にはコレルリ等の当時の流儀にならっているが、シンフォニクな豊かな響き、強弱の鋭い対比、音楽の劇的な変換、即興的な自由さが、ヘンデルならではの斬新さを表現している。

■ F. J. ハイドン チェロ協奏曲 第 1 番 ハ長調 Hob. VIIb:1

100 曲以上の交響曲を作曲し「交響曲の父」と呼ばれるフランツ・ヨーゼフ・ハイドン (1732-1809) は、チェロ協奏曲の分野においても代表的な曲を残している。

「第 1 番ハ長調」は、永い間その存在だけが知られ楽譜は現存していなかったと思われていたが、1959 年に至り、作曲されて以来約 200 年ぶりにプラハで楽譜が発見された。1961 年に蘇演され、それまで有名であったニ長調の曲 (以降第 2 番と呼ばれるようになった) よりバロック音楽の痕跡を残しているが、チェロが開放的で明るく鳴り響き、非常に高度な技巧を味わうことができることから、現代チェリストの重要なレパートリーに組み込まれて、今日に至っている。

第 1 楽章は協奏風ソナタ形式の楽章であるが、ソロとトゥッティを鋭く対比させており、バロック時代のリトルネロ形式の痕跡が残っている。第 2 楽章はチェロと弦楽器のみによる静謐で叙情的な楽章である。第 3 楽章は全体にスピード感に溢れ、長く持続されたハイ・ポジションの使用などチェロの非常にブリリアントで高度な技巧を味わうことのできる楽章となっている。

■ A. F. セルヴェ 「サンクトペテルブルクの思い出」 作品 15

アドリエン・フランソワ・セルヴェ (1807-1866) はベルギーのチェリストで、ベルリオーズから「チェロのパガニーニ」と言われたほどの名手で、バロック時代にはなかったエンドピンを初めてチェロに取りつけたのも彼だといわれている。又作曲の面においても同時代の作曲家ベルリオーズやロッシニーからも信頼されていた彼は、輝かしい技巧を駆使した作品を次々と創り上げた。その作品の演奏効果の高さについては、若きカザルスが素晴らしい演奏でその難曲を完璧に弾ききった事で、自らを「セルヴェの後継者」と称する高慢なブリュッセル音楽院のチェロの教授を、言葉も出ない程にやりこめたという逸話も残っているほどである。

表題となっているサンクトペテルブルクは、彼の妻ソフィの生まれ故郷であり、1842 年に同地で結婚しており、1841 年から 1866 年までに 10 回以上同地を訪れている。曲は 1855 年に出版された。

■ L. V. ベートーヴェン 弦楽四重奏曲 第 15 番 イ短調 作品 132 <弦楽合奏版>

ルードヴィッヒ・ヴァン・ベートーヴェン (1770-1827) は 30 歳から死の前年までの生涯に亘って 16 曲の弦楽四重奏曲を残した。「作品 18」の 6 曲、「ラズモフスキー」の 3 曲を中心とする中期の 5 曲、そして晩年を飾る後期の 5 曲と大きくグループを形成している。第 15 番は後期の最後から 2 番目に位置している。

曲は 5 楽章からなり、第 3 楽章の冒頭には「病癒えた者の神に対する聖なる感謝のうた」、同アダージョ部分には「新しき力を感じつつ」と書き込まれているように、ベートーヴェンの作曲当時の生活体験がそのまま反映され、病気を克服して再び仕事に戻ることができた喜びと感謝がはっきりと刻印されている。

上記「感謝のうた」の後にはあたかも回復の喜びを表すかのような行進曲風の音楽が続き、さらにフィナーレは、はじめ<第 9 交響曲>の終曲として予定されていたが、交響曲の方はシラーの「歓喜に寄す」による例の名高い終曲を作ることになったので、当初予定された素材をこの弦楽四重奏のフィナーレとして完成した。このようにベートーヴェンの実際の体験との結びつきともあわせて、曲の展開がきわめて明快で、また各素材も充実しているところから、後期の弦楽四重奏曲の中では最も広く親しまれてきている曲の 1 つとなっている。

(R.A.)

■酒井睦雄 Mutsuo Sakai 指揮

桐朋学園高等学校音楽科を経て1971年桐朋学園大学卒業。指揮を斎藤秀雄、秋山和慶両氏に、クラリネットを北爪利世、二宮和子、F. フックス各氏に師事。1971年より相愛オーケストラ指揮者、1977年ザルツブルクにてO. スイトナー氏に師事。同年、東京にてS. チェリビダッケ氏のゼミナールに参加。2001年には芦屋室内合奏団を率いてドイツのバンベルクにてバンベルク交響楽団団員とともにニューイヤーコンサート、ドレスデンにてフラウエン教会落成記念コンサート等を行い好評を博す。2005年第19回京都芸術祭音楽部門 京都府知事賞受賞。現在、相愛大学教授として音楽専門家の育成にあたる傍ら、1974年より芦屋室内合奏団音楽監督、岐阜交響楽団常任指揮者、1990年より高知室内管弦楽団指揮者をつとめる等、アマチュア合奏団の発展にも尽力している。

■林 裕 Yutaka Hayashi チェロ独奏

東京芸術大学を卒業。日本音楽コンクール第一位、黒柳賞を受賞。アフィニス文化財団、ローム音楽財団の奨学生として、フライブルク音楽大学院を首席修了。青山音楽賞、松方ホール音楽大賞、兵庫県芸術奨励賞、名古屋市民芸術祭審査員特別賞、神戸市文化奨励賞、神戸灘ライオンズクラブ音楽賞などを受賞。

主催している「CELLIST COMPOSER COLLECTION」に対して、名古屋音楽ペンクラブ賞、大阪文化祭賞グランプリ、音楽クリティッククラブ本賞、文化庁芸術祭新人賞を受賞。ソリストとしての起用も多く、朝比奈隆氏との「ドヴォルザーク チェロ協奏曲」共演等は絶賛を博した。また兵庫県芸術文化センターシリーズの年間支持率No1になった。

CD「SOLOist」にシュタルケルが賛辞を寄せた他、レコード芸術の特選版になった。元大フィル首席奏者。いずみシンフォニエッタのメンバー。相愛大学准教授、神戸女学院大学非常勤講師。

■芦屋室内合奏団

音楽監督	:	酒井睦雄	団 長	:	青柳 良		
事務局	:	伊藤恵子	末松秀樹	会 計	:	堀田純子	
ヴァイオリン	:	青柳 良	勝部 操	喜多智佐子	富田良吉	◎鳥丸安雄	藤本恭子
		堀田純子	☆三村誠子	○吉岡道子	*伊藤耕平		
ヴィオラ	:	○伊藤恵子	音村圭一郎	鈴木雄二	*津田咲彩		
チェロ	:	○鳥丸直子	堀田一之	宮崎晴夫			
コントラバス	:	末松秀樹					
チェンバロ	:	小津久子					
オーボエ	:	I *東口佐和子	II *吉村梓				
ホルン	:	I *佐藤友貴	II *三谷政代				

◎:コンサートマスター ☆:アシスタントコンサートミストレス ○:パートリーダー *:客演

当合奏団は1965年、当時の神戸大学、甲南大学の学生オケのメンバーが主体となって、芦屋市の故橋本宗夫氏宅に集まり、スタートした。1974年からは、相愛大学教授 酒井睦雄氏の指導を受けている。

40年以上に亘る演奏活動で取り上げた作品は、バロック、古典派、ロマン派、現代音楽まで幅広く多数にのぼり、また鍵盤楽器、弦楽器、管楽器奏者、声楽と多方面の方々との共演も積極的に行ってきた。

毎月2回の日曜日、練習場に各々愛器を携えて集い、練習時間は真剣そのもの。休憩時間は一転して、話題も多岐にわたり、やや脱線しがちではあるが、音楽をはじめとする芸術などをとことん楽しむ団員揃いの合奏団である。

本年度は、スイスを拠点に演奏・指導・プロデュースをされているヴァイオリニストの河村典子先生に室内楽指導して頂きました。この場を借りてお礼申し上げます。